

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	管 25K06	氏 名	植木 淳
研究主題 —副主題—	子供の規範意識を育む学級活動の展開 —日常生活場面を実践の場とし、道徳の時間との関連を図る—		
所属校	国立市立国立第二中学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	<p>東京都は、「東京都教育ビジョン（第3次）」（平成 25 年 4 月）の中で、現在の子供の規範意識の現状について次のように述べている。</p> <p>「大人は、自分たちが子供の頃と比べて、今の子供たちが社会のルールやマナーを守っていないと見ている。このことを裏付けるように、『ルールを守って行動する』について、『とても当てはまる』と答えた児童・生徒の割合は、学年が進行するに従い低下し、中学生、高校生では、4人に1人とどまっているとの調査結果がある」</p> <p>このことから、東京都は「豊かな人間性を培い、規範意識を高める」ことを取組の方向として示している。</p> <p>また、文部科学省は、道徳教育の充実に関する懇談会の「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）」（平成 25 年 12 月）の中で、道徳教育の現状について、以下のような課題を指摘している。</p> <p>「教員の指導力が十分でなく、道徳の時間に何を学んだかが印象に残るものになっていない。」</p> <p>「他教科に比べて軽んじられ、道徳の時間が、実際には他の教科に振り替えられていることもあるのではないか。」</p> <p>子供たちの道徳的実践力の育成において、道徳の時間が大切であることは言うまでもないが、道徳教育は道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行われるものである。特に、特別活動での教育は大切である。</p> <p>そこで、集団生活におけるルールやマナー等社会の一員としての規範意識を育成するためには、道徳の時間を印象的なものにする工夫とともに、朝学活、休み時間、給食の時間、終学活、清掃の時間のような周囲との人間関係の営みである日常の生活場面を道徳的実践の場として積極的に活用することに効果があることを探った。</p>
II 研究の方法	<p>都内公立中学校第2学年5学級の生徒 165 人を対象に、同じ質問項目の調査を（1）平成 25 年 9 月 20 日（金）、（2）同年 10 月 24 日（木）、（3）同年 11 月 29 日（金）の計 3 回、約 1 か月の間隔で実施した。</p> <p>質問の構成は、ルールやマナー、思いやりについて、「行動はできるが気持ちに伴わない生徒」、「気持ちはあるが行動ができない生徒」という二つの傾向が存在する現状を踏まえ、行動傾向と内面形成の二つの側面に関する質問を合わせて 36 問作成した。質問について「はい」か「いいえ」で答える形式とした。</p> <p>1 回目の質問紙調査の後に 1 回目の道徳の授業を行い、約 1 か月後、2 回目の調査の後に 2 回目の道徳の授業を行った。2 回目の道徳の授業の後には、約 1 か月間継続して道徳の時間との関連を意識した学級での道徳的実践の取組を行い、その後、3 回目の調査を行った。</p>

	<p>中学生の段階では他者との関わり合いの中から規範意識を育んでいくという方法が有効であることから、学級の課題に対し、みんなで目標を設定して取り組む活動、学級の生活環境を整える活動、交流を通して互いを認め合う活動等、主として人間関係を深める活動を学級の中での取組として行った。</p> <p>道徳の時間では、他者に対して自分の考えを発信し、意見の交流をすることが大切であることから、ネイティブ・アメリカンの伝統的な話をする場であり、聴くことによって多くを学ぶ体験をする「トーキングサークル（話の輪）」を積極的に活用し、自分の考えを深める場とした。</p> <p>道徳の授業実施後、授業で養った道徳的実践力に関連付けた道徳的実践の取組を学級の中で意識的・計画的・継続的に行った際の生徒の変容を、事前・事後の質問紙調査から見て、朝学活、休み時間、給食の時間、終学活、清掃の時間のよいうな日常の生活場面の積極的活用に効果があることの実証をねらった。</p>
<p><b>Ⅲ 研究の結果</b></p>	<p><b>1 質問紙調査の結果から</b></p> <p>(1) 1回目の調査では、36項目中16項目で「はい」と答えた生徒の割合が全体の80%を超えていたが、3回目の調査では36項目中20項目で80%を超えるようになった。</p> <p>(2) 特に次の3項目では、「はい」と答えた生徒の割合が大きく増加した。  「何事にも前向きな態度で臨んでいますか」(15.6%増加)  「あれこれアドバイスしてくれる人との付き合いをしていますか」(15.3%増加)  「失敗や困難があっても、最後まで頑張っていますか」(11%増加)</p> <p>(3) 特に次の2項目では、一定の増加はあったものの、依然として「はい」と答えた生徒の割合が低かった。  「一人ぼっちの人を見つけたら、自分から誘ってあげていますか」(8%増加、42.4%)  「誰かの役に立っていると感じますか」(12%増加、35.7%)</p> <p><b>2 学級活動での道徳的実践の取組結果から</b></p> <p>(1) 教師主導で取り組ませても、生徒の心の変容を見ることは難しい。特に中学生の段階では、教師からの価値の押し付けを嫌う。生徒が主体的に学級の課題について話し合い、生徒の中から解決策として提案された取組を生徒自身で行っていくことに効果があった。</p> <p>(2) 自他について考える時間をもつことが大切である。その中で生徒自身の気づきが成長につながる。「自問清掃」の取組は、生徒の中に他者のために何かをするという意識を高める機会を作ることができた。</p> <p>(3) 「1日1ページ学習ノート」の取組は、一見、個々の家庭学習の取組であるが、学級全体で行うことにより連帯感が生まれ、学級内での話題にも上がるようになった。</p>

	<p>(4) 本研究の取組の前まで、「生徒の規範意識を醸成させるには、ルール遵守についての指導が大切である」という生活指導的なイメージしかもっていなかった学級担任が多かった。しかし、生徒同士の関わり合いの活動を通して規範意識を醸成することができるという新しい視点をもつことができるようになった。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>調査の結果から、道徳の時間と関連付けた日常の生活場면을積極的に活用した道徳的実践に効果があることが実証された。生徒は周囲との良好な関係の中で、目標に向かい自らを成長させたいという意欲を高めることができた。</p> <p>学級活動での取組によって、意見交流のしやすい和やかな雰囲気が学級につくられた。そのような環境の中で、他の良いところに気付き、周囲の頑張りに励まされ、自らも高めていきたいという意欲が育まれていった。</p> <p>しかし、一定の向上は見られたものの、他者のために何かをし、誰かの役に立っていると感じることでできる生徒は依然として少なく、自己有用感や自尊感情の低さが今後の課題として残った。</p> <p>他者に関心をもち、他者のために何かをする機会を増やす意識的・継続的な取組を、更に校内で規模を広げて行っていくことにより、課題解決の方向が見えてくる。</p>